

GCOE-SRC 研究員セミナー 第3回ミニ・カンファレンス報告 2012年7月29・30日 於:小樽

2011年2月の第1回、同年7月の第2回に引きつづき¹、3回目のGCOE-SRC研究員セミナー・ミニカンファレンスが2012年7月29日(土)と30日(日)の2日間にわたって行われた。今回は全体的なとりまとめを福田宏が行い、宿泊施設等の手配を井上暁子が、各セッションの企画を左近幸村が中心となって行った。会場は昨年に続き宮崎悠氏の協力を得て、小樽市生涯学習プラザを使用した。例年のない暑さの中、若手研究者を中心に途中参加者も含め24名が集まり、熱気のこもったセミナーとなった。

【第一セッション】

第一セッションでは、今年度からSRCに赴任された高橋美野梨氏(日本学術振興会特別研究員)、イギリスから帰国されて間もない加藤美保子氏(第4期ITPメンバー)が報告。共に国際関係論・地域研究を専門とする両氏が、「規範」概念を軸に、主権国家(ロシア、デンマーク)とEU外交の在り方を論じた。

まず加藤報告では、国際政治における「規範」を「～すべきである」という価値観に従って行動を規律するルール・行動基準と仮定し、高橋報告との共通の土台を定めた。その上で、1980年代から90年代にかけ唱えられていたロシアの「大西洋主義」が、2000年代に入ると「ユーラシア国家」としてのロシアをアピールする方向へ転換し、現在では「ヨーロッパ・太平洋の国家」ロシアという遠大な構想が登場するにいたった経緯を解説。大幅に揺れ動くロシア外交の自己イメージを、国際規範、「ヨーロッパらしい規範」、「アジアらしい規範」とは何か? という観点から検討した。具体的には、チェチェン紛争や死刑制度をめぐる、人道の危機への対応と主権の尊重の優先順位がロシアとEUの間で問題化した事例に着目。EUの行動規範を受動的に受け入れながらも、究極的には国益を優先させ、しかしEUの規範に代わる新規範を打ち出すこともできないという、ロシアの苦しい現状を明らかにした。

続く高橋報告では「ブーメラン化するEU規範」という斬新な切り口から、EU=デンマーク関係およびデンマーク=グリーンランド関係という、重層化する規制構造を捉えようという試みがなされた。今回は、非軍事的な領域における代表的な事例である先住民生存捕鯨の問題を取り上げた。それにより、従来は対外関係における影響力の側面から議論されてきたEU規範が、内側の加盟国にも「逆輸入」される特性も持つことを明らかにした。

これらの報告に対し、コメンテーターの福田宏氏からは、まず加藤報告について、いわば「蛸足配線型」のロシア外交では、あらゆる方面を網羅するキャッチフレーズが次々と

¹ 1回目と2回目の報告書は以下の通り。

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_05/achievements/files/20110620new_report.pdf
<http://borderstudies.jp/essays/essays/pdf/takiguchi.pdf>

出される傾向にあり、これを「規範」という概念で斬るのは可能であろうか、といった指摘や、「ユーラシア」という言葉が持つ政治性（例えば大東亜共栄圏や中欧（Mittleuropa）と比較して）はどのようなものか、という質問が出された。また、高橋報告については、捕鯨問題を取り上げることについて、デンマークとグリーンランド間では見解が一致している事例であるため、他にも争点化がより一層明瞭な事例が挙げられるのではないか、という指摘がなされた。



その他にもフロアから質問が相次ぎ（兎内勇津流氏、高橋沙奈美氏、宮本万里氏）、時間いっぱいまで議論が続いた。福田氏のまとめにもあったように、今日、APECにおけるロシアの動向や、温暖化へのグリーンランドの対応が注目されつつあることを考えると、両氏の報告はライジング・スターのセミナーにふさわしくタイムリーな論題を提供するセッションであった。

【第二セッション】

第二セッションは「移民」をテーマとしたラウンドテーブルであった。ミニ・カンファレンスの恒例企画となったラウンドテーブルも、今回で三度目。カンファレンスの変化と成熟につれて、ラウンドテーブルも展開してきた。昨年のラウンドテーブルは「地域研究（者）のありかた」をテーマに、「研究者自身」と「その方法」に焦点を合わせたものだったが、今回は「移民」という「特定の対象」を様々な視点から討論するラウンドテーブルとなった。4名のパネリストと討論者による5つの視点が折り重なる問題提起に、質問と議論が交錯する密度の濃い3時間を超すセッションとなった。

池直美氏の報告では、近年になって急速にグローバル・コミュニティーへと姿を変えている韓国の安山市が事例として取り上げられた。1970年代末以降、労働移民や結婚移民などによって多文化社会化が進展してきた韓国であるが、近年の変化はそれらに比しても急速なスピードで拡大している。とくに工業地区としての役割を担うことになった安山市においては、急速に増加する移民に対する政策が進められているものの、所与の問題に

対応し切れていない現実もある。「包摂」を基底とする多文化社会の実践にとって、安山市の取り組みが今後のモデルケースとなり得ることが示された。

中山大将氏の報告は、戦前・戦後のサハリン島を事例として、「移民」・「植民」や「越境」の概念と認識そのものを問い直すものであった。とりわけ参加者の興味をひいたのは、移動していないにもかかわらず国境線が変更されたことによって「越境」を経験し、「移民」の範疇に扱われることとなったサハリン入植者の帰属意識とアイデンティティの問題であった。また、サハリン島の近現代史は「一国史」の視点からは捉えきれないという指摘も示唆に富むものであった。「移民」の認識そのものの再検討と、あらたな認識的枠組み（その一例として、「跨境」）を発展させる必要性が提起された。

引き続き井上暁子氏と小松久恵氏の報告は、文学研究者の立場から「移民作家」および「移民作家」によって編まれた文学作品を俎上に載せた報告が行われた。井上報告は、社会主義体制末期から現代にかけてポーランドからドイツへ「移住」した作家に注目し、やはりここでも「移民」の概念が再検討された。ポーランドの歴史的背景やドイツ・ポーランド関係の変化によって、かつての「亡命文学」・「移民文学」は現在では異なるカテゴリーとして理解すべきであると指摘された。現在では、むしろ作家の越境は「移動」「引っ越し」の範疇に含まれる経験であり、「移民文学」というカテゴリーの再検討の緊要性が提起された。

他方で小松報告は、イギリス在住の南アジア系作家の活動と作品を事例に、移民二世／三世の作家がその移民出自を作品に抽出する「戦略的な移民性」を描き出した。アジア系作家の活躍目覚ましい昨今のイギリス文壇において、彼・彼女らは「移民作家」というレッテルを、時に自身の身を寄せる隠れ場所として用いると同時に、時に多様なエスニック・コミュニティの混在するイギリス社会の典型でしかないと不問にする。同時に、その作品らに対しても、血統の源流となる地での生活経験を有さない作家や、移住先のイギリスで中流階級以上の生活を送ってきた作家に対しては、その「アジア移民性の描写」が批判の対象ともなっていることが示された。



報告に引き続いたコメントと質疑においても、各報告が扱った対象地域の歴史・社会・文化背景に関する具体的な問いかけから、移民研究の比較研究の可能性を問うもの、移住者自身のアイデンティティと帰属意識の変化を問うものなど、予定された時間を超過しても収まりきれないほどの白熱した質疑と討論が行われた。

今回のラウンドテーブルを通して、かつてのステレオタイプ化された「移民」の概念が転換を迫られていること、また研究者による「移民へのまなざし」は問い直しを迫られていることが認識されたように感じた。「移民」を冠したセッションであったにもかかわらず、4報告者全てが「移民」概念の恣意性と抽象性、またその概念と自己／他者認識をめぐるアイデンティティの揺らぎを問題視したことに象徴されている。対象地域と研究対象領域を交錯させた今回のラウンドテーブルは、今後の「移民研究」のあり方を考えさせると同時に、「移民研究者」を自認しない者にとっても有意義な示唆を得る機会となった。

【第三セッション】

本セッションでは、「人文・社会科学による流域研究と流域間比較の可能性」というタイトルのもと、地田徹朗、峯田史郎、花松泰倫の3氏が報告した。3氏はともに、中国を流域の一部に含む国際河川の開発や管理について議論を展開したが、それぞれのディシプリンは異なり、地田氏は歴史学を、峯田氏は国際関係論を、花松氏は国際法を専門とする。加えて、各報告で議論の対象とされた河川も異なり、地田氏は中央アジアのアラル海やバルハシ湖に注ぐ河川群、峯田氏は東南アジアのメコン川、花松氏は北東アジアのアムール川について論じた。冒頭に地田氏から説明のあったように、本セッションの趣旨は、異なる河川流域に関する、ディシプリンを異にする3氏の報告をふまえて、それぞれの流域が抱える諸問題と、それら諸問題を浮き彫りにする各自の手法を比較検証すること、そして、そうした比較検証を介して議論の一般化を試み、様々な国際河川流域の開発と管理のあり方を研究する方法的枠組みを検討することにあった。

最初の報告者である地田氏は、歴史学者として、ソ連時代の河川流域の開発とその帰結を論じた。氏によると、1940年代以降に実施された、灌漑農地を拡張する政策や、過剰な取水、そしてダム建設に起因して、アラル海が大幅に縮小するにいたった。他方で、バルハシ湖に流れ込むイリ川の場合も当初は事態が類似しており、1960年代半ばから水力発電所の建設が開始され、灌漑農地の拡大が図られた結果、1970年代からバルハシ湖の水位低下を招いた。しかし、バルハシ湖の場合はアラル海と異なり、1970年前後からの科学者や市民における環境意識の高まりを受けて、河川流域の過度な開発に歯止めがかけられたという。このような議論をふまえ、地田氏は、特に、バルハシ湖やイリ川をめぐるのは、開発推進の主体と制度、および環境保護の主体と制度を、ソ連という国家大の空間的スケールに関わるレベル、カザフ共和国という国家内行政単位のスケールに関わるレベル、農民等の市民の生活圏というスケールに関わるレベルで多層的に分析したうえで、流域開発にまつわる歴史的帰結を総体として把握する必要性を説いた。

次いで、国際関係論を専門とする峯田氏は、国家を超えたリージョナルなスケールにおける討議と協力の枠組みである3つの組織について議論した。最初に、1995年に設立されたメコン川委員会が論じられた。同委員会は、水資源の開発と管理をめぐる地域協力を目的とし、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムの各国政府を中心的な参加者とし、中国、ミャンマーの政府をダイアログパートナーとする。次いで論じられたのが、同委員会により組織され、2001年に開始された「流域開発計画」である。本計画の目的は、水資源をめぐる各国開発計画の調整と、科学的情報の共有に基づく開発の影響の総合的測定である。峯田氏は、両組織の設立は河川管理をめぐる政府間協力の成果と評価できるものの、現実としてメコン川委員会が各国の開発を制御する権限をもたない限界が浮き彫りになっていると指摘した。他方、2004年に設立された「マルチレベル・ウォーター・ダイアログ」は、タイや国際社会のNGOを主催者とし、開発をめぐる各国の利害調整よりも、生活者の権利保護等のより広範な利害調整や、国際社会への建設的提言を狙いとする。各組織の説明をふまえて峯田氏は、リージョナルなスケールの問題から生活者のスケールの問題までを包括的に討議する場の構築の重要性と、マルチスケールな研究の必要性をあわせて提示した。



3人目の報告者である花松氏は、国際法を専門とする立場から、既存の国際法や各国法、各国間協定という人為的諸制度が、大規模な自然スケールを有する生態系を保護するうえで、十分な有効性をもたえていない現状を示す事例として、アムール川の問題を論じた。氏は、「河川流域」という言葉で通常理解される範囲よりも圧倒的に広い空間として、アムール川と、流域の湿地や森林、そして海が複雑に関連する生態系を説明したうえで、そのシステムが脅かされつつある現状を指摘した。特に、ロシアにおける木材輸出を目的とした森林伐採と、続発する森林火災、そして、中国における湿地の農作地化により、アムール川が鉄分を陸地から外洋に運び、海洋資源の豊かさを支えるメカニズムに悪影響がでていると論じた。花松氏は、こうした現状に対処し生態系の保全を目指すうえで現行の法制度に多くの瑕疵があると述べ、関係国の中央政府や地方政府に加え、河川の上流から下流、

そして海域に関わる諸アクターを巻き込みつつ共同の科学調査を実施する、マルチスケールな協力枠組みが重要と論じた。

3氏のディシプリンと研究対象の相違にかかわらず、各報告は、いずれも、スケールという概念を念頭に河川流域の問題を検討するものであり、セッションを通して、国家を超えた地域、国家、国家内行政単位、生活者、あるいは広域的生態系といった各スケールが多角的に論じられた。ただし、いずれのスケールの分析を重視するかは各氏で異なり、それゆえ、セッションの趣旨である議論の比較や一般化を目指すうえで、各報告の枠組みと着地点のすり合わせをいかに行うかが、質疑の時間に課題として指摘された。質疑の時間は、環境保護とナショナリズムの関係などの論点も示され、河川流域をめぐる研究の今後を考えさせるものとなった。

【第四セッション】

本セッションにおいては、本田晃子「映画は建築する—G.アレクサンドロフ『輝ける道』から見る全連邦農業博覧会」、井澗裕「ひとり摩天楼と首都の幻影—ハリコフ・ゴスプロム（ウクライナ）：空間的ヒエラルヒーと建築の辺境性（2）」の二報告があり、森下嘉之氏によるコメントがなされた。

本田報告は、1940年の映画G・アレクサンドロフ監督『輝ける道』を取り上げ、同作品中に、その舞台の一つとして登場する1939年の全連邦農業博覧会の映像を分析したものである。同氏はまず、同博覧会のパヴィリオン建築が、従来のロシア建築史において社会主義的リアリズム建築の完成の場と位置づけられていたことを指摘し、社会主義的リアリズム建築を目指す「諸芸術の総合」が、博覧会内においてどのように試みられていったのかを、豊富な資料映像を参照しつつ示した。

次に、この農業博覧会が、スターリンの指導下に遂行された五カ年計画の成果を展示する場であったことをふまえつつ、同作品において、「スターリン」を基点に表現空間が編成されていくさまを、社会主義的リアリズムにおける規範をいくつか示しつつ分析した。例えば、一点透視画法の消失点にその画面内で最も重要な対象を置くこと、また生身の人物より、絵画や彫刻等によって代理表象されたイメージの方が、物理的・象徴的に高位を占めること等である。

そして最後に、同作品における、映画の中に描かれた農業博覧会、その中のパヴィリオンとその内部というように、虚構が幾層にも組み合わさっていく構造を示し、スターリン期の空間イメージにおいては虚構と現実の区分が失効していること、従って「現実」という概念の明証性そのものの解体という観点から理解される必要があると指摘した。

井澗報告は、ウクライナ共和国ハリコフ市市街中心の自由広場に望む巨大建築、ゴスプロム（1928年竣工）を分析対象としたものである。最初に、ハリコフという都市が持つ歴史的な位置について説明があり、その上で、このゴスプロムが、内戦期に同市が「首都」とされた時代の急速な発展の象徴であり、かつ、実在するものでは世界最大級のモダニズム

建築であることが指摘された。

その上で同氏は、以下のような問題提起を行った。現代のアヴァンギャルド建築研究、特に日本におけるそれにおいては、その研究アプローチに、思想と言説と作品を「三位一体」の、不即不離の存在としてとらえて分析を進めていく傾向が見られる。これを同氏は「パッケージ主義」と呼び、その有効性を十分認めつつ、そこから分析対象として外れる建築、建築家たちの存在を指摘した。すなわち、「革命的な言辞や独創的な理論を武器として、時代の最前線を疾駆した人々」の背後に「巧みに前衛者たちの背中を追走する」人々が存在すること、その好例がハリコフのゴस्पロムであり、ゴस्पロムの設計者セルゲイ・S・セラフィーモフであるとした。

更に同氏は、セラフィーモフには、ある種の「巧みさ」、つまり、政治状況を慎重に見定めプロジェクトを思惑通りに推進するなどの実務能力が備わっていたと指摘する。彼がハリコフで批判を浴びつつしかし、同市において着実に自分の建築を実現していったことに、その明証を見、「したたかな建築家」と表現するとともに、同氏が建築としてのゴस्पロムから受けた最大の印象である「ふてぶてしさ」に、そのしたたかさを重ねて報告を結んだ。



以上の報告に対する森下氏のコメントは、ポーランドのクラクフ市に残る住宅団地の例を引きつつ、2報告の内容を整理するものであった。フロアからのコメントとしては、本田報告に対して、「虚構」の定義のありよう、また19世紀の万国博覧会と、今回取り上げた農業博覧会の相違等について、また、井澗報告に対しては、「パッケージ主義」の定義、及びタイトルの「辺境」とハリコフの位置づけの整合性等が、コメントとして出された。全体として、ロシア・アヴァンギャルド建築を軸に、本田・井澗の両氏がお互いを意識する内容の報告であったことが、議論の活発化へとつながり好結果を生んだと思われる。

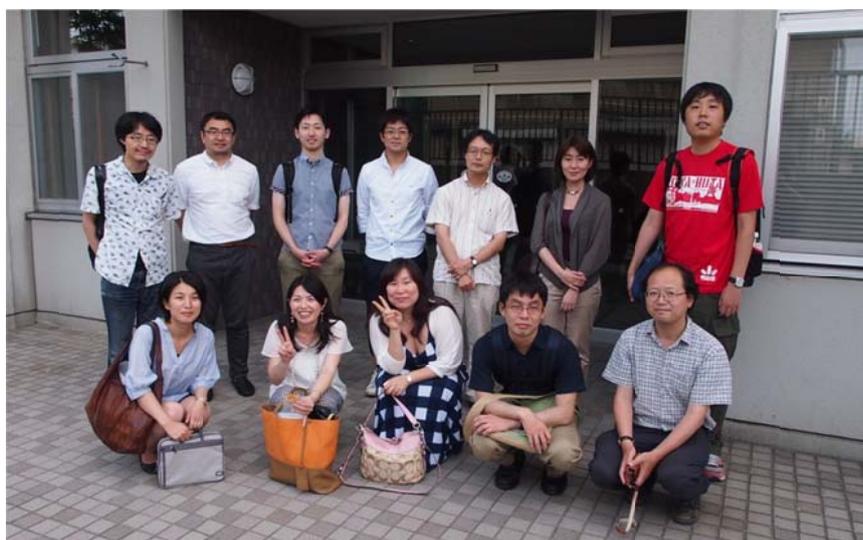
【全体のまとめ】

スラブ研究センターの研究者によるミニ・カンファレンスも今回で3回目を迎えた。当然、参加メンバーは毎回少しずつ変化しているが、研究対象やディシプリンを超えて積極的に議論しあう傾向は変わっていないと思われる。

今回の特徴は、セッションごとにかなり明確なまとまりをもたせた点にある。企画者の側であらかじめ国際関係、移民、環境、建築という4つのテーマを設定し、それに沿って人選を行った。報告を依頼したところ、幸いどの方も快諾された。ご多忙の中、報告を引きうけてくださった皆さんには、お礼を申し上げたい。さらに各報告者がセッションとしてのまとまりを意識した結果、ディシプリンによる研究手法や観点の違いが浮き彫りになる一方、そのことがむしろ議論の活性化を促すことになった。

ディシプリンの壁を超えて若手研究者が生産的な対話を行う場を定期的に設けられるのは、地域を基盤として研究を行っているスラブ研究センターならではの長所だろう。今後はこうした取り組みで得た知見を、各々のディシプリンにおける研究の場で活かし、新たな対話を行っていくことが必要になるとと思われる。

なお今回のミニ・カンファレンス開催に当たり、事務手続についてはスラブ研究センター事務の山崎茜さんに行っていたいただいた。この場を借りて感謝を申し上げたい。



文責：宮崎悠〔セッションⅠ〕、瀧口順也〔セッションⅡ〕、平山陽洋〔セッションⅢ〕、
高本康子〔セッションⅣ〕、福田宏・井上暁子・左近幸村〔執筆・編集責任〕

写真撮影：中山大将・井潤裕

プログラム

7月28日(土)

13:30~15:30 国際関係論セッション

- 加藤美保子：Inside or Outside? 価値と規範を通して考える“Euro-Pacific power”としてのロシア
- 高橋美野梨：ブーメラン化する EU 規範—
グリーンランドにおける先住民生存捕鯨と「本土デンマーク」

討論者：福田宏、司会：宮崎悠

16:00~19:00 移民セッション（ラウンドテーブル）

- 池直美：Home Sweet Home?（ふるさとは遠くに在りて）—
韓国アンサン市における移民コミュニティと排除の政治
- 中山大將：サハリン・樺太史と人口移動—「移民」と「植民」をめぐる
- 井上暁子：移民・地域・文学—ドイツ在住ポーランド作家による文学の変容（移民文学1）
- 小松久恵：Too Asian, not Asian enough—「移民文学」を考える（移民文学2）

討論者：左近幸村、司会：瀧口順也

7月29日(日)

10:00~12:00 環境セッション

「人文・社会科学による流域研究と流域間比較の可能性」

- 地田徹朗：中央アジア流域史研究の現状と展望—全体性の把握を目指して
- 峯田史郎：サブリージョナリズムと空間整理の試み—メコン川流域水資源管理を事例に
- 花松泰倫：伝統的流域概念を越えた陸海統合管理の試み—
アムールオホーツク生態系保護の動きを事例に

討論者なし、司会：平山陽洋

13:30~15:30 建築セッション

- 本田晃子：映画は建築する—G.アレクサンドロフ『輝ける道』から見る全連邦農業博覧会
- 井潤裕：ひとり摩天楼と首都の幻影—
ハリコフ・ゴスプロム（ウクライナ）：空間的ヒエラルヒーと建築の辺境性（2）

討論者：森下嘉之、司会：高本康子